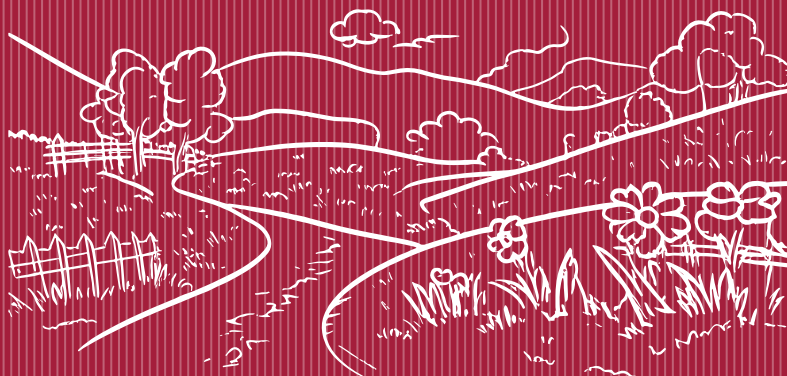


ばんけい

教育ほんといゅーず
かわら版こ みち
教育の小径No.205
2025 November
11月号

(一財)総合初等教育研究所参与

北 俊夫先生



今月のことば

さん こ
三顧の礼

目上の方が優れた人物に礼を尽くして、仕事を頼んだり、人物を見込んで特別に優遇したりすることです。「顧」には訪れるという意味があります。

子どもの発言は「教材」になる

- 一般に教材は、授業に当たって教師が用意するものと受けとめられてきました。授業中子どもが発する発言にも、教材としての価値があります。
- 子どもの発言を「もうひとつの教材」として生かすには、発言に対して、その場での教師の適切なリアクションが求められます。

教材の一般的な受けとめ

教材とは一般に、目標を子どもに実現させるため、教師が用意するものとして受けとめられています。教材は目標や内容と子どもたちのあいだに位置しており、子どもたちは教師の用意した教材に関わりながら学習を深めていきます。この関わりが学習活動です。

教科書教材とは教科書に掲載されている教材や題材のことです。視聴覚教材は視聴覚機器を活用した教材や資料です。地域教材とは地域の素材を目標に照らして教材化したものです。これらに共通していることは、いずれの教材も教師が用意していることです。これらの教材は子どもたちが学習するときすでに存在していますから、「ある教材」であるといえます。

それに対して、授業の展開過程で生まれる「もうひとつの教材」があります。子どもたちの発した発言の内容です。子どもたちが発言した内容を教材として活用することにより、子どもの思考や理解に深まりや広がりのある授業が展開できるようになります。ただ子どもたちの発言は授業を展開することで表出されますから、事前に想定し計画を立てることはかなり困難です。

授業者には、子どもたちの発言に対

して即応力が求められます。これが教師の「リアクション力」です。

発言へのリアクション力

最近授業を参観していて気になることのひとつに、子どもたちに発言をさせているのはよいのですが、発言のさせっぱなしになっていることです。そのため、子どもたちは活発に発言しているのですが、子どもたちの学びに深まりがみられません。

子どもたちの発言を聞いてみると、その子らしい個性的な考えや考え方、理解の仕方をしているもの、明らかに事実の認識や考えが誤っているもの、発言の意図や内容が不明なものなど気になることが少なくありません。

こうした場面で痛感することは、教師が子どもたちの発言を聞き流さず、リアクションをしてほしいということです。リアクションの対象は、発言した子どもと周囲の子どもたちです。例えば、発言した子どもには「どうしてそう考えたのか」「事実の押さえ方に誤りはないか」などと聞き返します。周囲の子どもには「Aさんのいいたいことがわかったか」「Mさんの意見に自分は思ったか」などと確認します。抽象的な内容には「例えば」と問いつけ具体的な事実を引きだします。

今月の記念日

11月10日 トイレの日

トイレ文化の創出と快適なトイレ環境の創造を目指している日本トイレ協会が昭和61年(1986年)に制定しました。「いい(11)ト(10)イレ」の語呂合わせです。

このように、教師がとっさの、しかも計算されたリアクションをします。このことで、発言した子どもだけでなく、周囲の子どもたちが自分の受けとめ方と比べ、思考や理解したことを確認したり、ときには修正したりしながら学びを深めることができます。

子どものつまずきこそよき教材

教師がリアクションするとき、特に重視したいのは、子どものつまずきに対する対応です。教師が誤りを指摘して、訂正することもあります。できれば誤りや不十分さを子どもたちに気づかせ、みんなでよりよい内容に高めていくようにします。

そのためには、子どもの発言を聞いたその場で、つまずいた発言内容の教材としての価値に気づき、瞬時にリアクションの言葉かけを考えます。従来から授業における子どものつまずきこそよき教材だといわれてきました。

授業中に子どもたちに発言を促したとき、発言のさせっぱなしではなく、その真意を確認し、その発言内容を生かした授業展開が求められます。これは子どもの発言内容を評価し、結果を指導に生かしている姿でもあります。子どもの発言を教材として活用することは優れた授業力だといえます。

「観」を考えると

「観」には観客、観察のように、見るとか眺めるという意味があります。ここでは、外見を観ることではなく、主観とか人生観のように、対象そのものの見方や考え方、内面の捉え方を指しています。

授業について語り合うとき、子ども（児童）という用語をはじめ、教師、学習（学び）、指導、教材、評価などさまざまな教育用語が登場します。多くの場面で、これらの用語の使い方をいちいち確認はしませんが、用語には固有の意味があります。

授業についての議論がかみ合わないときがあります。それは用語に対する捉え方に人によって違いやズレがあるからです。教師を例にすると、教師は子どもたちに教える立場にあると考える場合と、子どもたちの学習を支える立場にあると考える場合では、授業中の教師の役割が大きく違ってきます。

教師に対する考え方や捉え方を「教師観」といい表します。指導に対して「指導観」、教材には「教材観」と語尾に「観」を付けて表記し、一つ一つの用語の考え方や捉え方を確認していきます。「観」を捉えることで、用語の意味や役割が明確になります。校内で「観」を共有することでより深く豊かな授業が展開できるようになるものと考えます。「観」は授業に迷ったときや混乱したときに立ち返るところでもあります。確かな「観」をもつことは授業づくりの基盤です。

小欄では、日常的に使われている教育用語の語尾に「観」をつけ解説していきます。これによって、各学校での日々の議論が深まり、教育活動が一層充実することを願っています。

「教職調整額」の引き上げ

本年6月に「公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法」（給特法）が改正され、公立学校教員の「教職調整額」が段階的に引き上げられることになりました。「給特法」は昭和49年に定められた「学校教育の水準の維持向上のための義務教育諸学校の教育職員の人材確保に関する特別措置法」（人材確保法）にもとづいたものです。

具体的には、現在の教職調整額は基本給の4%ですが、これを令和8年（2026年）から毎年1%ずつ引き上げ、令和13年（2031年）に10%にするもの

です。これは現在顕在化している時間外労働（いわゆる残業代）に対する対価だとされています。

これに関連して、学校現場の長時間労働を解消するため教育委員会に対して、教員の業務量や管理など学校における働き方改革に関する計画を策定することやその実施状況を公表することが義務づけられました。

また、学校の組織的、機動的なマネジメント体制を構築するために「主務教諭」という職が新設されることになりました。具体的な職務内容は今後明らかにされるものと思います。

本法律の付則には、教員の月平均の時間外勤務時間を3割削減し、30時間程度にすることを目標にすることが示されました。

連載 教育界への 独りごと vol.1

なぜ片仮名文字が多いのか

近年、アクティブ・ラーニング、カリキュラム・マネジメント、ポートフォリオ、ルーブリック、コンピテンシー、ファシリテーター、コミュニティ・スクール、インクルーシブなど、多くの片仮名文字をよく見聞します。

令和5年に策定された第4期教育振興基本計画にはウェルビーイングという、日常生活ではこれまで聞かれなかった用語が登場しました。令和6年12月の「教育課程の基準等の在り方について」の諮問には、「デジタルの力でリアルな学びを支える」、「デジタル技術を活用したユーザビリティやアクセシビリティの向上」などの表記もみられます。さらに、GIGAスクールやDX（教育デジタルトランスフォーメーション）、

ESD（持続可能な開発のための教育）などアルファベットも使われています。

片仮名文字には、新鮮さを印象づけます。アピール性もあり、多くの人たちが注目します。ただこれらの用語を耳にしたとき、保護者をはじめ、多くの国民が、その意味内容をどこまで理解して受けとめているかは不明です。新しい用語を使うことで安心し、用語だけが独り歩きして使われている状況をかいま見ることもあります。

かつて、「日本の学校教育について語るときには、保護者がわかるようにわかりやすい日本語で説明しなさい。多くの人が理解できるように、市民権が十分得られていない外来語は極力使わないように！」と指導を受けたことがあります。

片仮名文字の多用化はグローバル化の表れかもしれませんが、日本語を大切にし、誰にでもわかる平たい言葉で語りたいものです。（O）

INFORMATION

教師のリアクションカード 「指導と評価の一体化」とは何か

「指導と評価の一体化」としての教師の適切なリアクションを具体的な事例をもとに解説！

著者／北 俊夫
定価／1,430円（税込）
発行／株式会社文溪堂
A5判 96ページ

ご注文は文溪堂
代理店まで



「教育の小径」の
すべてのバックナンバーを
文溪堂ホームページから
お読みいただけます。

お知り合いの先生にも
お勧めください。



ぶんけい 教育の小径 検索

編集後記

「教育の小径」は、今号より18年目に突入しました。コラムの新連載に加え、誌面デザインのリニューアルも行いました。デザインは変わっても本誌の姿勢は変わりません。時代とともに疾走する北先生から振り落とされないよう、精いっぱいついていく所存です。これからもよろしくをお願いします。（H記）



企画・編集：ぶんけい教育研究所
発行：株式会社文溪堂
発行日：2025年11月1日